

海外実習報告書

1 実習施設

Knappschaft Kliniken Universitätsklinikum Bochum

2 実習期間

2025年4月7日から2025年5月2日

3 実習施設の概要

Knappschaft Kliniken はドイツ・ボーフムに位置するルール大学ボーフムの附属病院である。1909年に地域病院として設立され、1977年から大学病院としての役割を担っている。内科・外科をはじめとする10の診療科を有し、高水準の医療を提供している。病床数は479床で、年間約22,000人の入院患者と約55,000人の外来患者を受け入れている。約2,000人の職員により、地域医療の中核を担いながら、教育・研究・先進医療の分野にも積極的に取り組んでいる。



4 Knappschaft Kliniken を志望した理由

5年生時にタイのチェンマイ大学で実習させていただいた際、ドイツからの留学生と一緒に行動し、彼女の豊富な医学知識と医学への情熱に非常に大きな刺激を受け、彼女が医学を学んでいるドイツという国、ドイツの医療に興味を持つようになった。奈良県立医科大学がルール大学で臨床実習する機会を提供していると知り、ぜひドイツで医療を学びたいと思い、志望した。

5 実習に向けての準備

まず、コミュニケーションをうえて不可欠な英語の学習を始めた。海外臨床実習に応募するにあたり IELTS の資格要件があったため、試験対策を中心に学習を進めた。リーディングについては300語程度の英文を毎日読み、リスニングについてはBBCのポッドキャストを登下校時など空き時間に聞いた。ライティングでは時間を決めてまとまった文章を書く練習を行い、その文章をChatGPTに添削してもらうことで改善点を見つけた。スピーキングに関しては、英語科のゼミ室やオンライン英会話を活用し、英語で会話する機会をできるだけ多く持つようにした。また、奈良医大で行われていた医学英語の講義の受講や、医療現場で使用される英単語の学習も行った。

次に、ドイツ語を学習するため、NHK ラジオ講座や、オンラインのドイツ語教室を受講した。特にドイツ語教室には、高校生から社会人まで幅広い年代の方々が参加しており、受講者同士の交流を通して新たな学びを得ることができた。

さらに、奈良医大への留学が決まっているルール大学の学生と連絡を取り合い、互いのことやドイツ・日本での臨床実習の様子などについて話をした。ドイツに友人ができたことで、知らない国へ一人で行く不安が和らいだ。またドイツでの生活を具体的にイメージすることもできた。その結果、精神的な準備ができただけでなく、荷物の準備など実際的な面でも着実に準備を進めることができた。

6 実習内容

4週間のうち3週は手術室で実習させていただいた。麻酔科の1日は7時15分からのカンファレンスで始まった。当直帯からの引き継ぎや当日の手術麻酔の確認などが行われた後、手術室へ移動し、7時40分頃から1例目の麻酔導入が始まった。

手術室は診療科ごとにフロアが分かれており、私が配属されたフロアでは脳神経外科および口腔・顎・顔面形成外科の手術が行われていた。脳神経外科の脊椎手術ではX線を使用することが多かったが、学生は防護服を着用しての入室を許可されていなかった。また、口腔・顎・顔面形成外科の手術は比較的短時間で麻酔導入の機会が多かったため、私はそちらの手術を見学することが多かった。

ドイツでは医学科最終学年である6年生は Practical Year と呼ばれ、日本の研修医のように手技などを多く任されている。学生として教わる立場ではあるものの、チームの一員として医療に携わっていた。例えば、ルート確保や採血は指導医の監督なしに自ら行い、気管挿管や中心静脈カテーテルといった侵襲的な処置も医師の指導のもとで行っていた。また、患者のベッド移乗や体位の調整、使用した機器の消毒など、できることを自ら探して積極的に動いていた。このような医療チームに貢献しようとする姿に刺激を受け、私も何かできることがありそうだと感じた時にはまずグローブを装着して準備するように心がけた。同じ科の手術に継続して参加することで、麻酔の手順を覚えて次に行われることを徐々に予測できるようになり、簡単な作業ではあるが役に立てる場面が増えていった。積極的に取り組み続けていると、医師や看護師の方々から信頼されるようになり、任されることも増え、実習がより充実したものになっていった。ルート確保や胃管の挿入、麻酔薬の準備など、初めての経験も多く得ることができた。一方で、医療者間の会話がドイツ語で行われるため、現在の状況を理解できず、何もできずに見ているだけになってしまうことも多かった。急ぎの場面での指示もドイツ語で行われるため、ルール大学の学生は理解して行動できるのに対し私は止まったままということもあり、できることが少なく悔しい思いをすることも多々あった。

言語の壁は、実習中に最も困難に感じたことである。会話を理解できないため状況把握が困難であっただけでなく、カルテが読めないために患者情報や手術中の記録内容を把握できなかった。また、指導医の先生がルール大学の学生や若手医師に指導している内容を理解することができれば、より多くの学びが得られたと思う。先生方が同じ内容について私にも英語で説明してくださることがあったが、情報量は明らかにドイツ語の方が多く、得られる知識に差があることを悔しく思うこともあった。さらに、ドイツの先生方や学生の皆さんは日本人よりはるかに英語が上手であるがネイティブではないため、英語での会話にドイツ語が混じることもあり、理解が困難な場面

もあった。

日本との違いとして印象に残っているのは、医療従事者の男女比率である。女性の外科医が多く、執刀医・助手・看護師・麻酔科医の全員が女性という手術を見学したこともあり驚いた。看護師の男女比も、手術室だからということもあるのかもしれないが、ほぼ半々であるように感じた。また、各手術室には前室があり、麻酔導入は全てそこで行われ、患者は鎮静された状態で手術室に入室していた。モニターや手術の準備による騒音がある手術室ではなく、静かに麻酔導入を行うことができる前室を用意することで、患者が安心して麻酔を受けられるようにしているようだ。手術後、患者はすぐに病棟に戻るのではなく、手術エリア内にある観察室へ移動していた。観察室には看護師が常駐し、麻酔科医からの申し送りを受け、バイタル管理などを行っていた。また、麻酔看護師という職種があり、麻酔科医が来る前にルート確保やモニターの準備を行ったり、麻酔科医の補助を行ったりしていた。麻酔看護師がいることで麻酔科医の負担が軽減され、次の手術を円滑に開始できることができ、有効な制度だと思った。

残りの1週間は集中治療室（ICU）で実習させていただいた。ICUの1日は朝の回診から始まる。医師は2チームに分かれて患者を担当し、学生はどちらかのチームに加わる形だった。回診には麻酔科医だけでなく外科医も加わり、真剣な議論が交わされていた。ドイツ語で行われるため私にとっては理解できず辛い時間でもあったが、時折、学生が英語で解説してくれることがあり非常にありがたく、嬉しかった。すべての医師が各自のiPadで電子カルテを確認しながら、患者ごとの状態やToDoリストをチーム全員で共有し、それを各ベッドサイドのホワイトボードに記入していた。毎日1時間以上かけて丁寧に回診が行われていた。

回診の後は主に学生に同行した。学生の仕事は、患者のところに一人で行き、問診・視診・聴診・触診を行い、全身状態をカルテに記入することだった。全員がチェックリストを持ち、それに従って診察していた。私にも聴診などを経験させてくれたが、言葉の壁により自分で患者の承諾を得ることができず、学生に頼ってばかりで情けなく感じた。採血も学生の仕事であり、何人もの患者の採血に同行し、私は準備や検体の提出などを手伝った。ここでも、ルール大学の学生の能力の高さに驚かされた。採血などの手技はもちろんのこと、患者の病態などについても私に英語で説明してくれ、その姿を見て、私はもし奈良医大で留学生と行動することになった場合このように英語で説明できるだろうかと考えた。

ICUで印象に残っていることは、全ての部屋に大きな窓があり、自然光が差し込むため明るい環境だったことである。外の木々や鳥の姿も見えることで、患者はリラックスすることができるように感じ、昼夜の区別もはっきりとするためせん妄の対策にもつながりそうだった。大きな窓があるという環境は手術室も同様であった。窓のない手術室に長時間滞在すると時間感覚が分からなくなってくるが、窓があったおかげで自分自身も手術室内で穏やかに過ごすことができたように感じる。

驚いた点として、ICU内でもマスクを着用しないということがある。実習開始当初、病院内でのマスク着用義務がなくほとんど誰もマスクを着用していないことに驚いたが、重症患者がいるICUでもマスクを着用しないことにさらに驚いた。一方で、

感染症患者の部屋ではN95 マスク、エプロン、グローブ、帽子を着用が必要であり、対応の差が大きく不思議に思った。

7 生活環境

滞在させていただいた寮（左の写真）は大学病院までトラムや地下鉄、バスを乗り継いで1時間程度、ボーフム中心部（中央の写真）までトラムで10分程度の場所にあった。周囲には自然が多く、治安もよく安心して暮らせた。都会すぎず田舎すぎず、住みやすい街であった。



また、ルール大学がトラムで2駅の位置にあるため学生が多く、アジア、中東、アフリカなどからの留学生の姿も多くみられ、アジアマーケットやハラール食品店もあった。ルール大学周囲には飲食店などが多く、ドイツでファストフードとしてよく食べられるケバブをテイクアウトして大学構内の景色が良い場所で友人と食事したこともあった。天気の良い日に屋外で食事することは一般的なようで、同様にピクニックを楽しむ学生が多くみられ、また飲食店でもテラス席で食事を楽しんでいる人の姿をよく見た。

休日には、ボーフム中央駅から電車に乗ってデュッセルドルフやケルンに出かけて都市の観光をしたり、ライン川のクルーズを体験したりした。奈良医大に来るルール大学の学生さんが臨床実習を行っているドルトムントを訪ねたこともあった。ボーフム付近の日本では観光地として有名ではない都市にも出かけ、ドイツに住んでいるからこそできる経験ができた。



8 反省点

滞在中に最も苦勞したことは、やはりドイツ語であり、日常会話ができる程度までもっと勉強しておけばよかったと反省した。会話の内容が分からないため、それが相談事なのか雑談のようなものなのか判断できなかった。質問したいことがある際に話しかけるタイミングを見つけることが難しく、知りたかったことをそのままにしまふことも多かった。しかしもし忙しい時に質問していれば、「今は忙しいからまた後で」といった対応をしてもらえたはずであり、もっと積極的に話しかけるべきだったと反省している。

また、留学生としてどこまでのことをしていいのか分からず遠慮してしまうこともあった。ある手技を経験できなかった際に、「自分からやらせてほしいと言ったのか？」と後から指摘され、能動的に動くことを心掛けていたつもりでも、受け身になっている部分があったことに気づかされた。もっと積極的に手技などを経験したいという意思を示していれば、さらに多くの経験を得られたのではないかと感じている。

今回の経験を通して、将来もし海外留学する機会があれば、語学力を一層高めてからから臨みたいと思う。また、奈良医大での実習でも受け身にならず主体的に行動し、多くの経験が得られるよう努力したい。実習以外のことに対しても、積極的に取り組む姿勢をこれからも大切にしていきたい。